

学校のちよつといい話 19

退職を控えた二月の個人懇談で、ある保護者から言われた一言により、私の教員人生は大きく変わるようになりました。

「二度と先生のクラスにはなりたくありません。」退職まであと一か月の時に、まさかの言葉でした。「先生はとても素晴らしい人だと思っけれど、うちの子のことをちゃんと見てくれていない。他の子たちと同じようにしつかりと愛情を注いでくれない。二度と先生のクラスにはなりたくない」そう言われ、懇談後に職員室で泣き崩れたのを昨日のこのように覚えています。

悲しさや悔しさ、毎日一生懸命に心を尽くしてきたつもりなのに、なぜ? どうして? という気持ちがあったものの、このままその子の一年を終わらせるわけにはいかないし、そう言われるということには、私に責任がある。そう思い直して、主任や恩師に相談しながら、次の日からどうやって関わっていくべきかを一緒に考えていただきながら、残りの時間を過ごすことにしました。

まず、毎日その保護者に、園

での子ども様子を伝えること。

どんなに些細なことでもいいから、こんな遊びをした、どんな発言をした、と細かく伝えるようにしました。そして、その子とは、今まで以上に密に関わるようにし、一日一回必ず抱きしめました。クラス全員に同じように愛情を注いでいたつもりでしたが、いつの間にか「しつかりしているから私がいなくてもできるだろう」と思っていたことにも気づきました。きつとそのお母さんも、私に伝えることに勇氣が必要だったろうに、最後の懇談で伝えてくれ、私に最後のチャンスを与えてくださったと、感謝の気持ちがわきあがってきました。そして何より、ご家族みんなが、どうか今日一日幸せに過ごせますように、と毎朝お祈りすることができました。

そうして迎えた終業式の日、退職の挨拶を終えた私の元に戻ってきて、「先生のクラスになれて、本当に幸せでした。いつも愛情いっぱいに見てくれて、本当にありがとうございました。来年もうちの子を見てほしかったです」と言葉をかけてくださ

った。先生とはどうあるべきか、どう関わっていくべきかなど、いろいろなことを考えるきっかけをくださり、私を本当の幼稚園教諭にしてくれたそのお母さんと子どもに、今はとても感謝しています。(O)

家族の絆 エッセイから

家族の形

小諸市立坂の上小学校四年 大森 敢友 かんすけ  
家族には、いろいろな形があると思います。みんな同じではありません。ぼくの家族は、お父さん、お母さんと四才の妹がいます。いつもは、円の形をした家族です。春休みは、キャンピングカーで、伊勢神宮へ行きました。おいしい物を食べたり、船に乗ったり、たくさん笑ったりしました。

でも、時々円の形がくずれます。それは、ぼくの頭の中に、家族の事をわすれてしまつて、自分中心になる時です。それがきっかけで、家族の円の形が四角や三角になって、家中ぎこちなくなります。自分が思っている事をつたえるのはかんたんですが、相手をきかずつけてしまう事もあります。

それは、家族や友達に対してでもいいです。

こうして家族四人が丸いテーブルで、笑いながら食事をできる事が、「家族のきずな」だと思えます。家族の形は、丸い形がぼくは好きです。

(令和元年度第五回「家族のきずな」エッセイ集・小諸モラロジー事務所)

◆編集後記◆

◎「巻頭言の田淵教育長の指摘される「道徳的な生き方を学び、その実践」が最大に評価されたなら、日本の教育観は原点に戻る気がしてならない。

◎「師の心、弟子知らず」「親の心、子知らず」と、昔から言われる。「親」以上に「師」に影響を受ける人は多くいる。最近、師を持ってない教師は多い。師になるためには師がどうしても必要である。師を持てる者は幸せである。また、伝えるから、伝わる感性を磨きたい。

◎障害者の雇用を蚕で繋げる取り組みが紹介された。ある意味一番困難な取り組みである。高齢者による日本伝統の蚕産業に障害者が入り社会性を事業性が両立させている。出荷時の集合写真の喜びは「働いて、笑おう」というビジョンの体現である。

◎無事に返して当たり前前という富士登山。富士山は「目的」ではなく「手段」である。自分の中にある富士山への挑戦が大切である。「あなたは、あなたが大好きだよ」と、言葉にして言われたことがない子どもたちを、いかに信じ抜くことができるかにこの取り組みの醍醐味がある。

◎前号で掲載した麗澤大学は箱根駅伝予選会で十三位でした。これまでの努力に敬意を表するとともに、次回箱根路を走れるように応援しています。

麗澤大学陸上競技部の挨拶へ  
<https://www.reitaku-u.ac.jp/news/ite/1775382/>

